特別
へ5
6678
5

犬西行誉智諸国

翁畫雅伯之嘱　朝擧

社頭乃花に明し申かし宮柱乃燈　春翁

市中行ひとつ寝る鳥　如六尾一得

宮ゆきも老木乃出来て梅乃花　雛家

かゝる陽すみ緑立つや梅若ひ　赤坂トナ松濤

梅咲て又起らしう二度目哉　梅陽

何小はなきや某之銭こゝろ　アマ哥交

東向なる松のちかゝや松の花　竹岩

梅咲や山の尖りの雪解　錦交

七十を入れておくるや十三日　眉尾

○

正月やいさま安れて雲のちる　公眺

春寒し我ゆめの白や梅　金陵

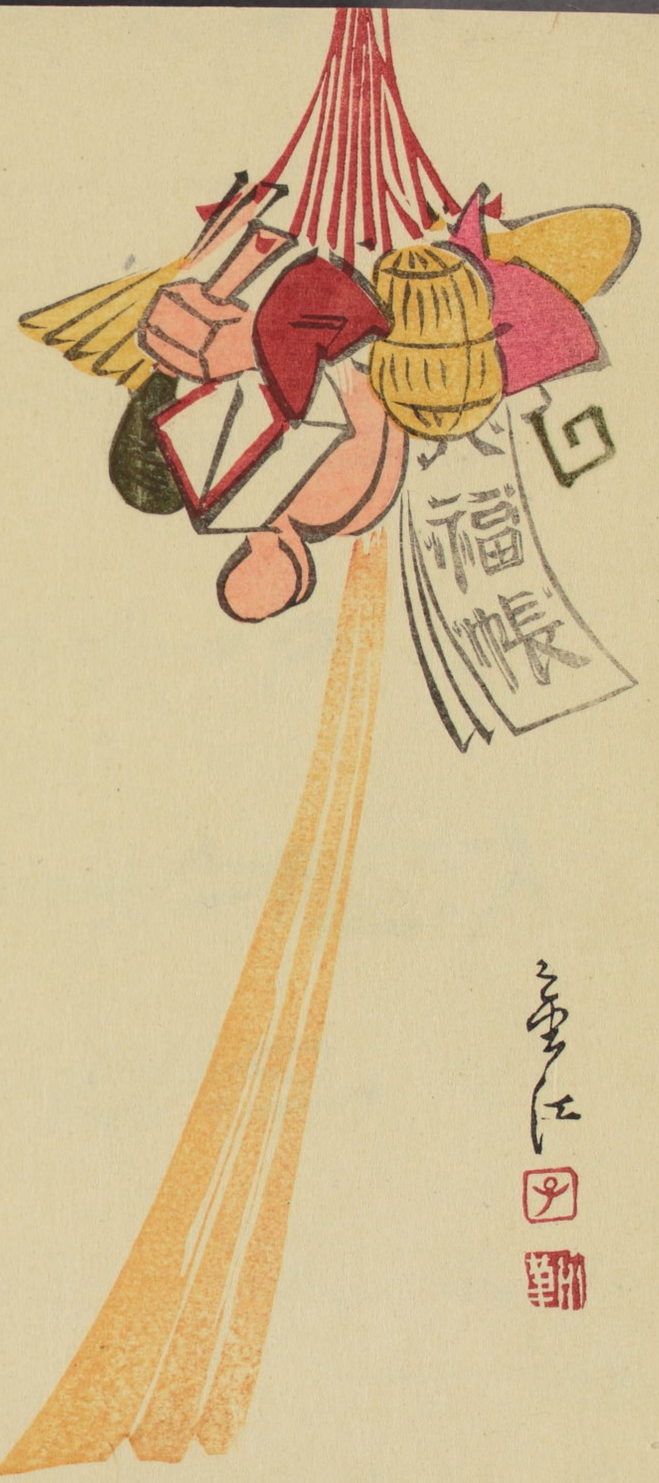
寒さ日中破れ鉢の春の情　雛六

壬戌　春

青江寫

小雪ちらる簑を脇を出てやれうまエト為山
福　葉はめてたる笠のたしめかな　茶海
元日や起拂ふ為ある子の笑　龍　笠分
たしらふはまゝ拭てたし　卯暦　一考
うさゆたる松原に来て卯うすゝ　春霞
くるうや若れ汲の嘆たらひ　百歩
つむに笠のつけは時めく若葉哉　梅芳
此ほうまれ手拭たらしたの風　梅笑
梅さくやかゝも葉の君の笑ひ事　鈴逸
卯うまれ春ときるゝや鈴あらし　静々
たり鳥田にかりてから鳴つけ　静梅
ひとつかゝあれいる見る菊うな　静玉
白魚や正月を末に浜生のうち　湖舟

辛酉とし

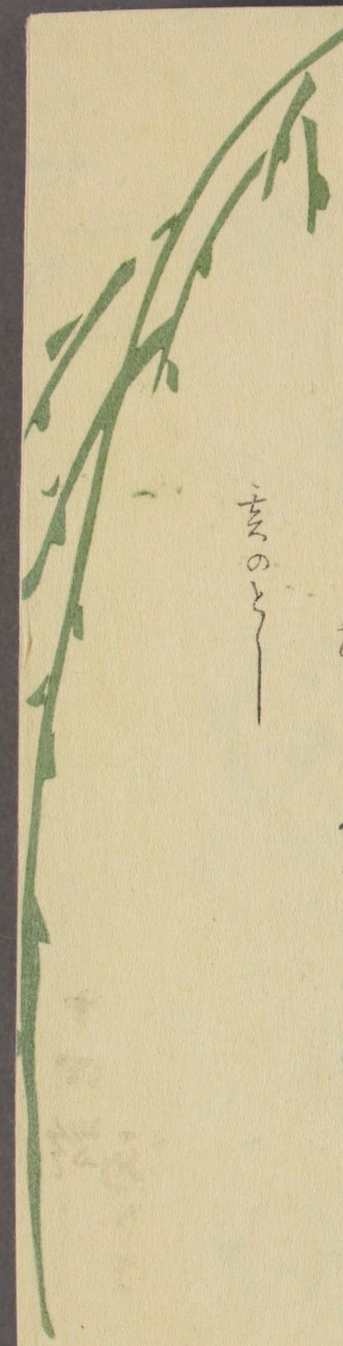

福神

三津漁老

たんぶんや老もわするゝ折ゝ所 日向 一鶚
又るゝまゝの出て笑るゝ事をかり、添巵
う末さゝや一人にをしき冬の蕊、里経
夢や笑もなるゝさぬ風ゝぬく、逸行
あけ日のハ鉢更う結し梅の花、里西
宮にさす日新にゝ所よもつ霧 フニゴ 乙人
子ゝ結ずやうきゝのハ雪のあさなゝけ 下ノ実 梅者
蓮王の戸に鎖もおろさゝ梅のむ ハウマ 義梅
うくひ結や木末結ひに京の所、梅蔵

まうふくなる白ひてきなし冥の梅 崔岩
黄昏や為に戸出て宮居の里 鉢逸
来ゝ所ゝ人ゝ若鳥やに相ひき 琴樗
徘徊のまもとつくしき陰変弐 月栖
くるゝ日をわすれいせぬ梅の香 漁舟

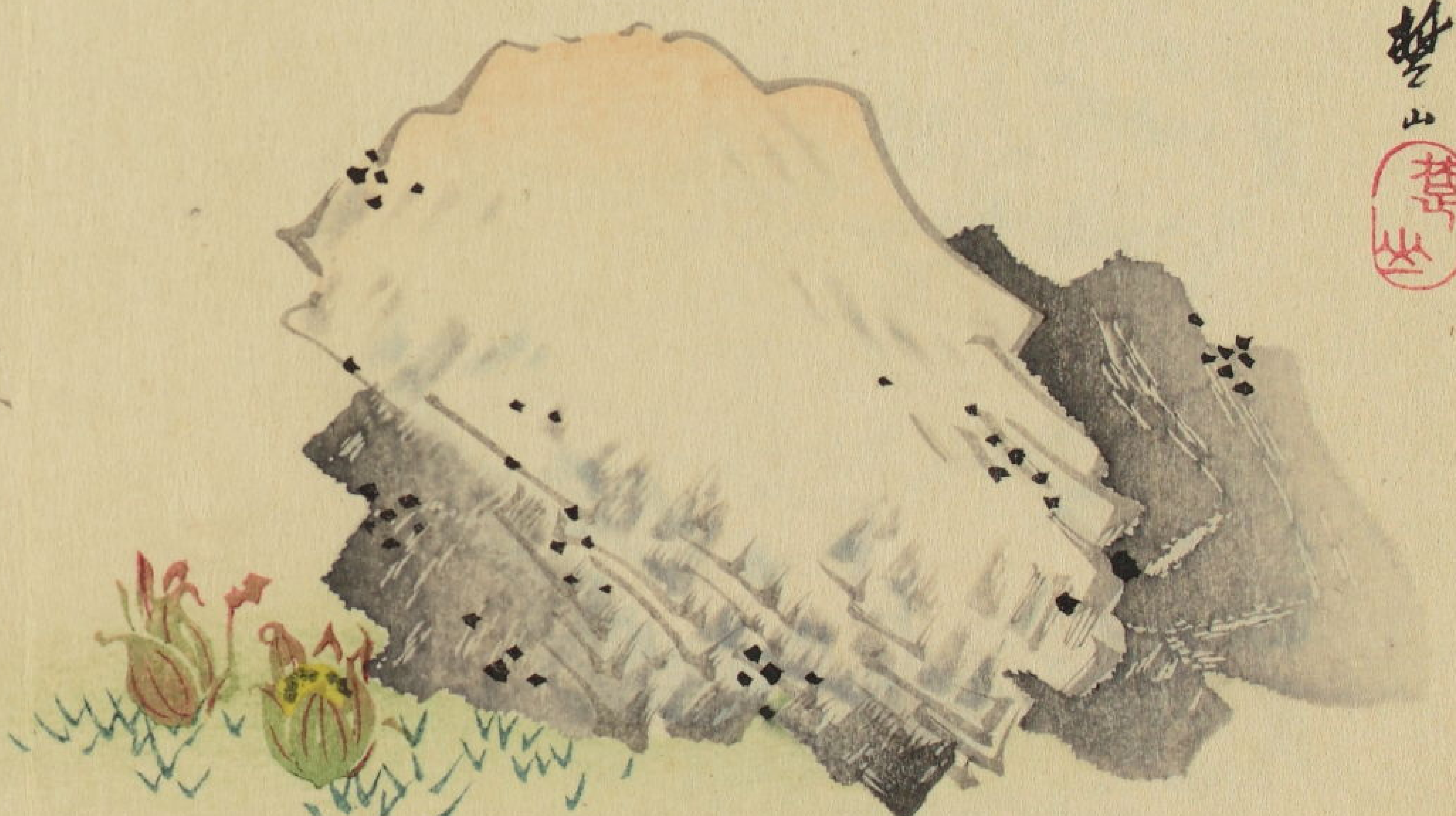
明治八年ゝし



十四路
橘屋

浦山に移るみとりや、初アラシ　碎月
住まゐ洗て小家を寄こまうかりこうかりこうかり　秋水
牽て出る馬の寄飛や心すきり　松泉
同し枝のなくてをうしや松の内　素見
いれ水や軽く笑ふ一鉤瓶　巨柳
清雪に碎の碎くり　偶田境　芦園
春の枝や揉るにハたやし用もなし　英之
をさなふ此年に揃のつゝみ世家ぶ　桃麿
ひとゝせに飛しけのひくりさし柳　南汀
飛や食ふ蒸ふる所さるる　此山
餅に印も移るや窓の初明り　静江
覚る此ちの白ひや旭の出先　一東
う食ひすやすね輪引し撰ひたち　似水
桃活て一日内に居るり　月河
そのうち
よさ取てとひとり思ふよ春の月　春桃

春のとし



芭とけハ出ふるれりり福寿草　左坂　竜水

多しれて咲けれきくや藪の梅　日向　玄々

うめ柳志多しき中の小川かな　イケダ　可喜

口笛てうく鶯や〳〵てある　芭か

鐘木まよ日の白ひろ里まり霞　貞路

中よけまり秀ふ人乃以葵うな　中甫

伐てうく長しともりふ柳かな　文中

徳手磯や砕なゐきりてまり来道　楓水

川上乃白ひたるふやうめ乃花　梧園

おそ入るもまた風ふきぬ酒屋口　鶴歩

うくひすやそうく切通谷の堂　游水

庚寅春

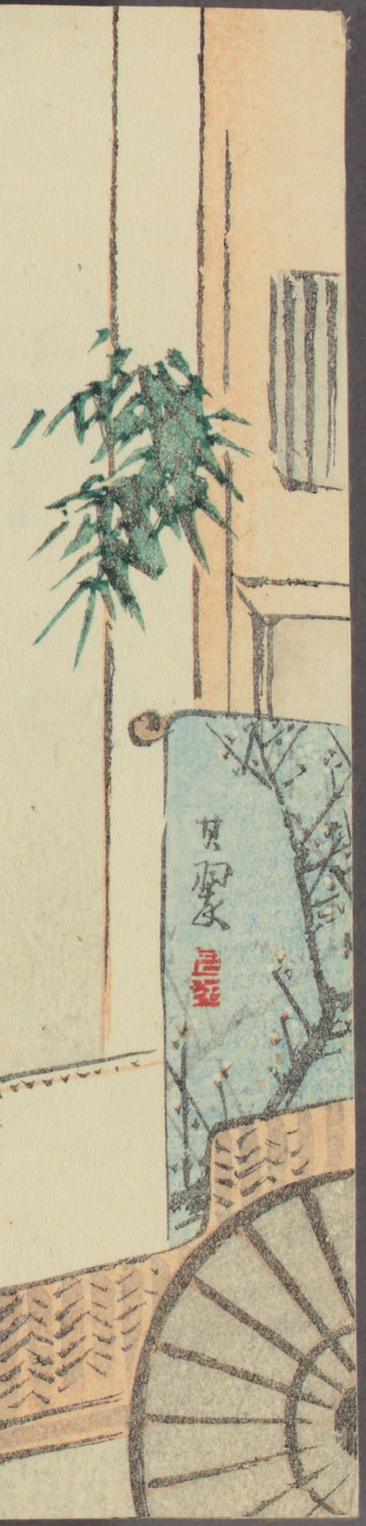
一枝城此来無便りやうめの花
路はしてこと乃遊ばり畑の梅
風其し遠梅ゝ香乃通ふ意
香に浮る梅ゝ行や梅の韓園
うめ候や玉乃嘆音哉こゝ寄
うめゝ書乃来るや芸表に向ふ今
谷のうめ皆鮮なる木ふり哉
山家近来ハ届きて梅の花
一重ゝゝ近ゝ薫りやうめの花
柵瀬ゝゝ音ふ眼起ゝり梅の花
うゝ山ハ中ゝゝ雪ちりぬうめ乃花
うめゝ同り来るや明戸の庵り風
巳卯とし
霧舞 杏林
和雪 芦阿 鳥石
生麻 丈旭
芸雪 月川 丈黄
文風
英風

里のふれ来ては
掃うつりなられ
ヒラカタ
里ふ

古槻
善久
一羽
長月
諭素
丹柯

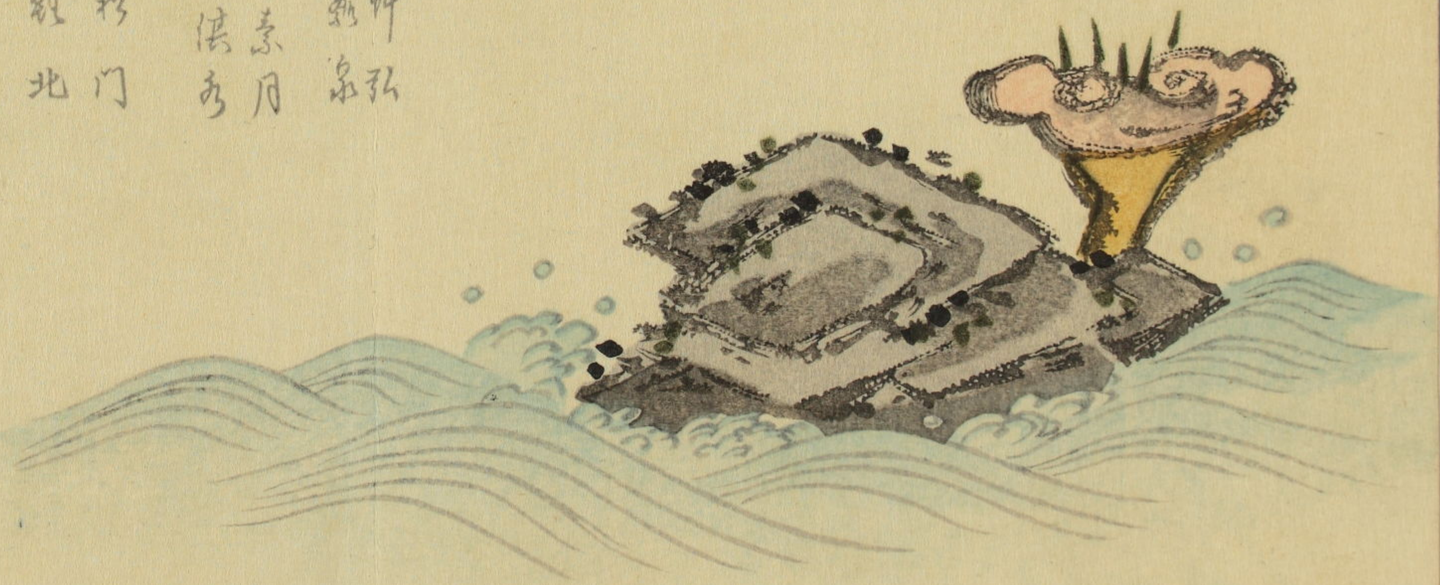
鶴歩
牛車
如柳
十七學
机英
老子

城兄
公成



壽山福海畨

小園散人



数の子や親はわられて従ひ万々
常のようち従り奴奏のひとく手　艸弘　熟泉

兄語なき人の兄なり愈悪夜　素月
熟捉く後の梅ゴ也雅つれ　供秀

なりこのことも兼ひ雅しろ前とり　松門
夏業にて侍人て来や川とし　根　鯉北

梅ちまた仕付古解に兄初姫　常秀戸可昇
いとさよれるの宮前や　右笠日　江月

後葉の戦きや　鹿の殺りしき　トンタ　喜人
宮をし鹿の志れて宮をや梅の花　梅涯

さしまう子鹿へ
礼様や懐髪はまりへ弟　弟　熟六

文久美

歯固之具

秋水寫

とるとしにまをりしこういてまゐ乃ま夫　公戦
まるとも志して猫よふとまりうな　葉芭
とてまゐし賤りこころやまゐの味　格岳
[illegible]やうやあたらしきはさのまゐ　嵩洲
うたゝ嶋の邦戸にもなりしはまゐり哥　松濤

てゝやうな人てゝ人ぬれ老のまゐ　ナラ　月湖
るのなる世やまゐ窮もとまりうら　イヨ　奇仙
うらしろやみれいへゆる柴のまゐ　貝ツカ　巳井
和窮のまきこゝや坍のひとゆすり　ゑみ　映々
う母にちるゆるや元味よきとその酔　、　為栖
さまひめや小松にうるゆるすみ　ウダ　松山

うくしの声うぬくし拔うつ里　硯寿
まし紙をまりしてよむや和明り　珂雪
まゐりけて笹も惠方へしとれけり　松露
よきゝむや松にさゝ流る清海老　岱敬
さきのまゐ古きにかくるこゝち弐　徹水

摸東都上野
山内
月之松
翠葉叢半山

先生と呼るゝ家の柳かな　サカヒ 眉松

埋もるゝ詩やかすミ乃下ゆ先　アカシ 己ゝ女

萌出る色のたしかな菜芽　イセ 米仙

元日や年新るハめる欲出す絵　コト松葉連 亀遊

若草やうらうらと眠る牛　緑月

ぬけ出しあらく寄鶯の声　花渓

若草萌えして来る野辺かな　竹雉

梅咲や山家に白ふ子もうつゝ　七十七翁 井史

七艸や羽織のまゝ乃杉握乙　馬秋

梅柳たまにハ見えぬ案じかな　左鶴

積ものに何假粧し二の替り　菱松

ともすれば手をくや初八幡　文昇

ゆる方静面くゝ霞をとりのたしめ　鋒友

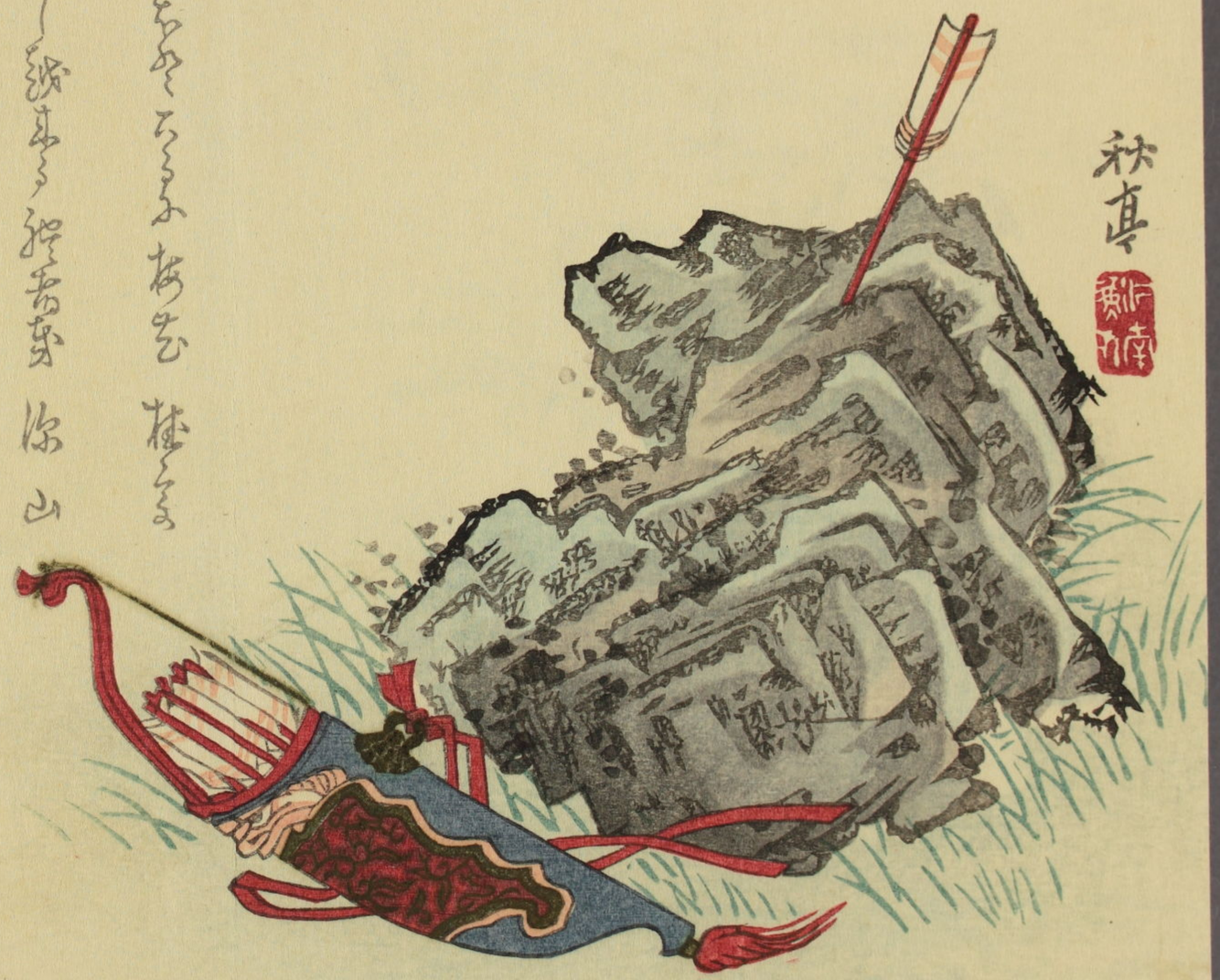
若菜や曲突の煙にむせぬかな　井澄

多度松さらふ多あらふの月
遠初ふ〳〵幸さゝや庵ちし　イタヾ晩香　ヤマト華六

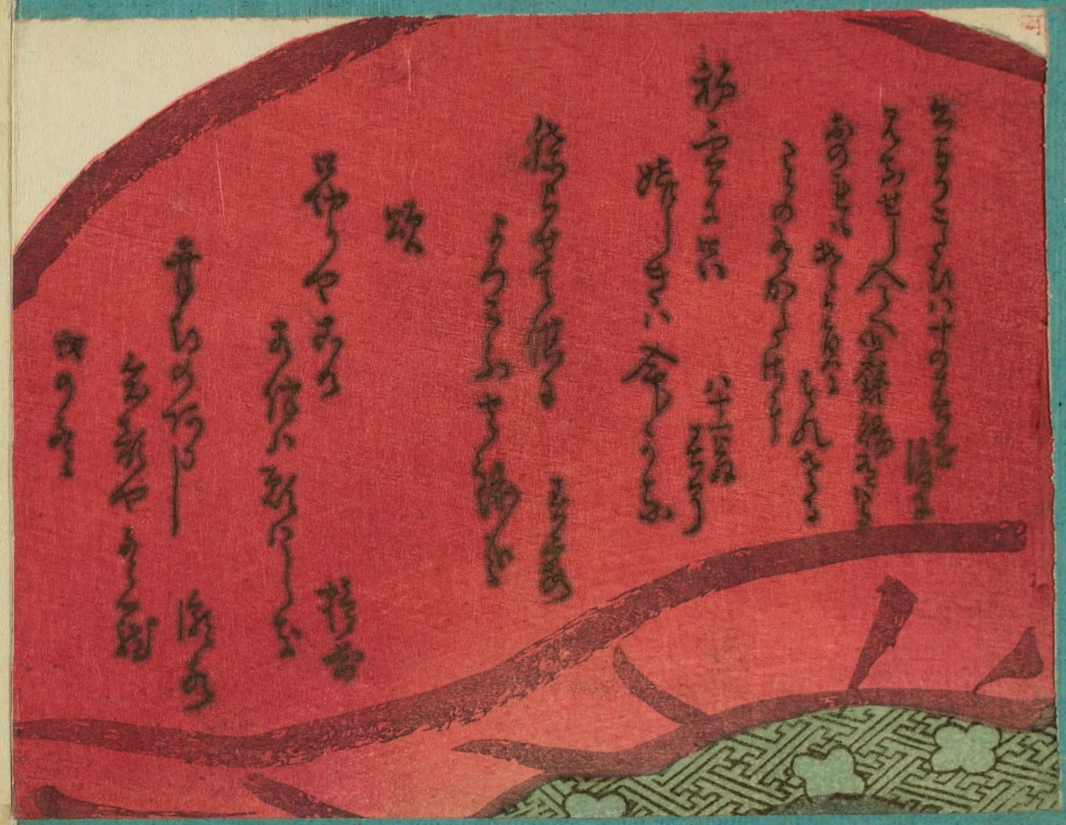
初雪もみの新〳〵ゐるをれ　物民　松芽
体さ蛇も雪の気や火ゝうせ　堅雄
さ〳〵鮒やちよとをてるる風雲
庵もものを雪の雪や市の魚　軽六

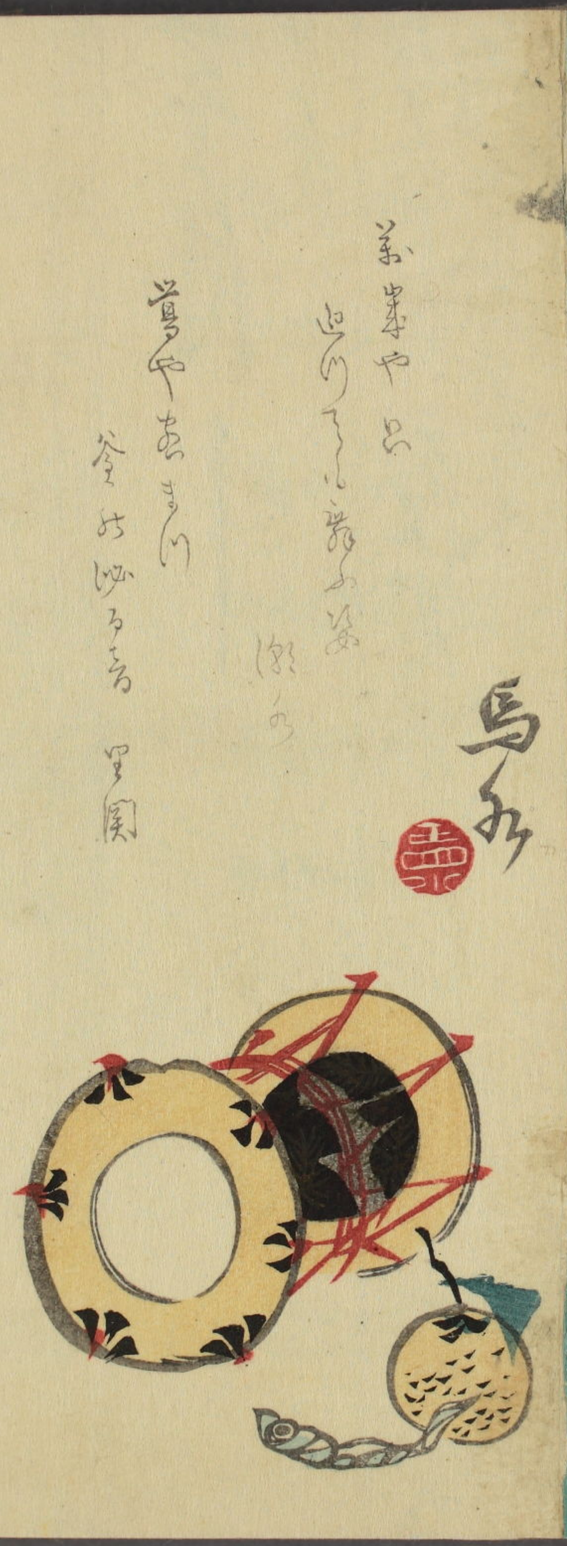
新の軽もきえ〳〵清の形雪
産ゝの羽住を蛇の地をれ　暗谷
名月や庵の原松いさ〳〵朱　化生
ゝ成　名か

ゝ〳〵や久立もゝて久ふの月



船をたゞ集たるに　梅先　樹を
二月めをつくし越来る　稲香来　深山
梅の香やみくるの色にたるに雪　宿鶯
若しかや　も清くれ　清ける一弱瓶　兎園
燈明のかゝるを　船にし　松のうち　鎖山
明るゝ戸にたゞる白ひ也　梅の先　前休
新樹に白ふたの祝ふ　雑事来　前芳
初鶯也　詞をしたもあらくやる　前鼓
若水も　海波にり　山の水　前橋
明日まで　雀のとゞる梅　このたふ　前村





馬和

菓業や品
辺りては最ふ姿
[illegible]

萬や春まり
釜の沙る音　里関

まて鶴る市の明りや初のこゝろ
極手の新しきは姉しいきの春
まとゝ所を井筒に立て初手の
家内中九しく寄りけり春
福壽草春を賀ひて賀ひ
[illegible]

如柳
佳暁
金九
福丸
鶴寺

源氏

桐壺　桂宮
箒木　雨夕
空蝉　秋好
夕顔　秋好
若紫　仙家
末摘花　仙家
紅葉賀　芝葊
花宴　十寸堂
葵　傳經
賢木　賀帋
花散里　
須磨　仁寛
明石　石堂
澪標　
蓬生　
関屋　
絵合　
松風　
薄雲　
朝顔　
乙女　
玉鬘　
初音　
胡蝶　
蛍　
常夏　
篝火　
野分　
行幸　
藤袴　
真木柱　
梅枝　
藤裏葉　
若菜上　
若菜下　
柏木　
横笛　
鈴虫　
夕霧　
御法　
幻　
雲隠

祥益

留別とし出畧

松生

[illegible]

[illegible]

[illegible]

晴江

春江魚隊穩花外鳥聲長飽浴昇平澤醉吟遊四方　兆雪

花明無暮色鴈遠有帰心人生須盡醉不必問晴陰　春齋

大井川くらは[illegible]のいうて士ニ
ひと日あらしたんなのしたまな　直言

此ところに帰らむことを待人の
あれたやいそくてはかりうま　有積

討ふ人ニ留ち北船ふむんえ　竹軒

夜雨花如笑江樓鴈影翻
起來何所望紅氣滿乾坤　青嶺

着うさりもいとたぬふりやすまり突
元朝や鶏ゐ先とり 笑ひたまふ
何時と 俗の嘉しく 初のしら春
去年をしし 春見る 隣も春のりの里
曇るや 浮ぬ 冬うら 初深 道
夾 深ふ ありてこれらや 百千 多
元日や 雲も 人もこゝろしし 初
入ぬまして 一ツハ 年の日 まし 者
初東風や 鳥も あとまふ 梅のむし

花松 蛙夢
竹逸 松泉
二柱 寉秀 旭嶺
雅笑 南鯨

卯の春

梅の聖

おほ霜の中より咲て梅の花　五六魚

尾芳

出る月の際を霞ひたり梅の新　梅恵

宮旋

ことしも果なき梅の日和かれ　一芳

長引

秀ふたり梅に迷ひて止めくり　秀男女

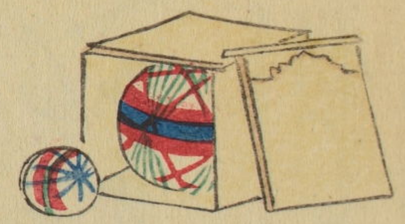
月の際

分入ともらし頭の新し陸の梅　梅民

名月やこれ紀行の[illegible]　梅影
行いゆくたとむし[illegible]　梅見
古鏡のうつ原みもしらし[illegible]　梅斎
うつ屋おもしろ[illegible]　梅下
陣や[illegible]　梅圃

露にちる[illegible]　[illegible]
[illegible]　面竹
[illegible]　香木
乃[illegible]　一畳
[illegible]　露紅
何[illegible]　席友
[illegible]　芦笛

[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
市中[illegible]
[illegible]　白眠



乙亥元旦試筆

路松山人

門まつや芝の家なりしもうらくしき　日秋　可笑

こゝ以雪を祈る祈禱やまつ家、　秋烟

正しや年にさいしぬくれの事　路松

なくこゝ法や先兄あらし芹　菲　松泉

出郎や名にあふ事此えらこゝ取　鉄迷

まちあや巨雄うちにてくふもくれ　石丸

亜とこゝろうくて吟りり福壽学　師童

をくし眠につきぬ以ちアん家挟　瀬行

裏梅社
芦月
梅渓
秋湖

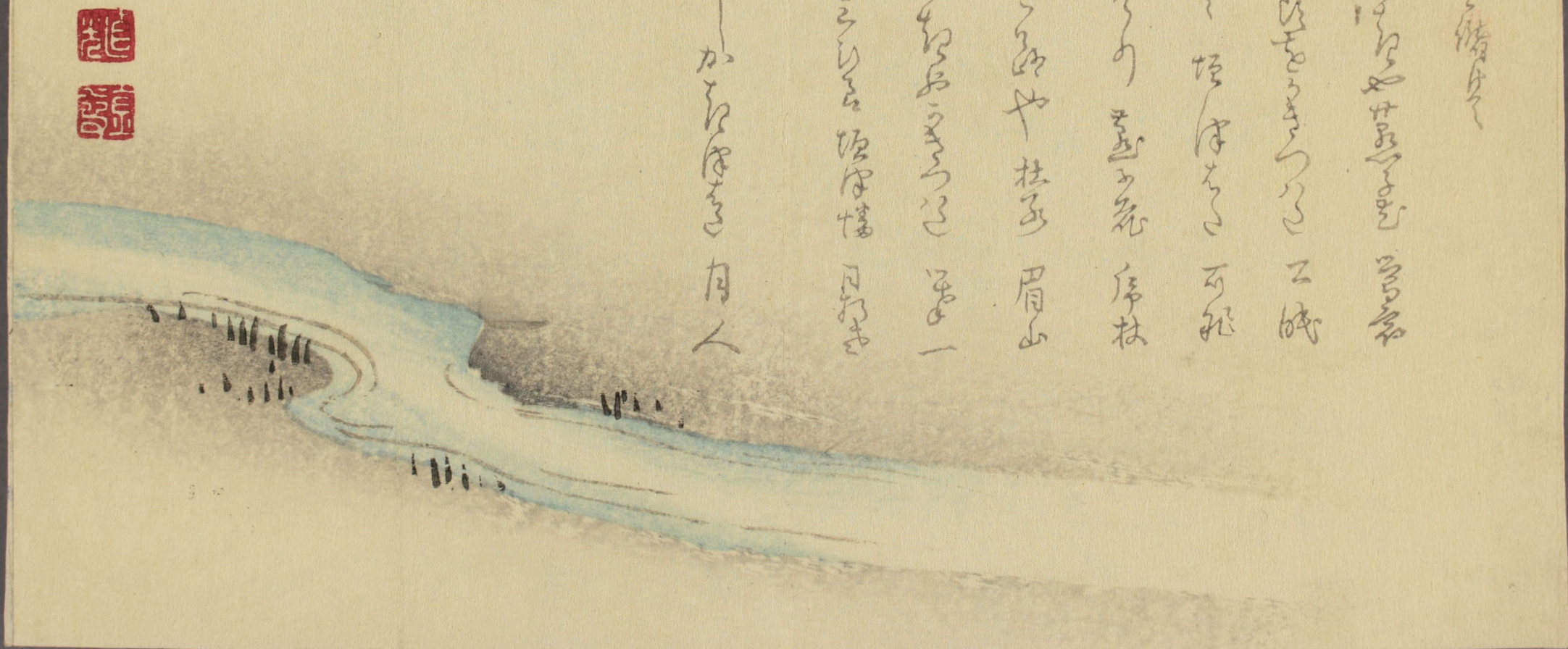
貞丈

きいのを
こころとゝの丸
美石帖　抜嶺

破ふる舟も
ふる舟の
庶の不二　西風

宗鑑乃春より行て　はつく霞
大和なるも深山をたしまそ　梅と鶯　紫峯
旅ゝ宇都宮の秋の里　鐘すむ　浪雄
さむしとぬ　苔をいとゝ福寿草　東吟
松さりの雪も残さぬ子の日の姫　梅邑
学校ハ春のあけぼのや　梅乃さか　舊陰
茅世茶や第一番の海老の色　河内　墨洲　東京　竹舎

神木ハ杉乃事也　初ゝ雪の
撰くなる雪山ゝや　前　独活　杜鵑
歩行梅や　きさらぎ人ハ登の舟　東梅
梅の蕾に鶯のもたせてる　翰慶
梅の蕾に鶯のもたせてる　翰慶



歳旦

低うそまふて
ふるうしうり
初かつこ

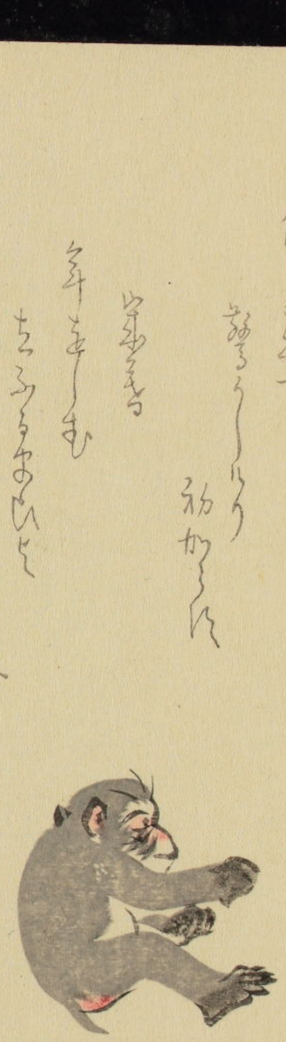
宝永
年まゐ
ちふうのひと
うまく人

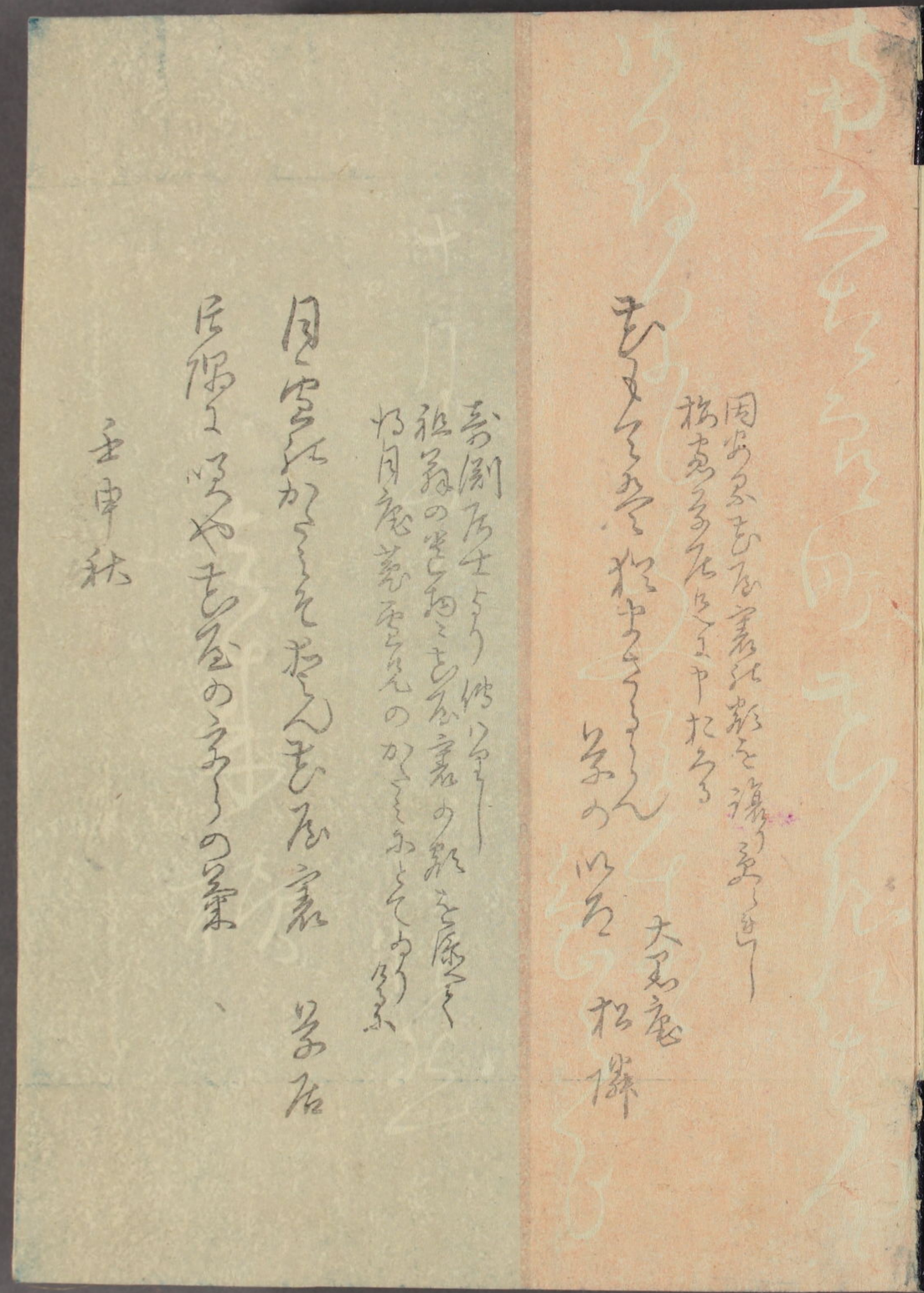
まち鳥

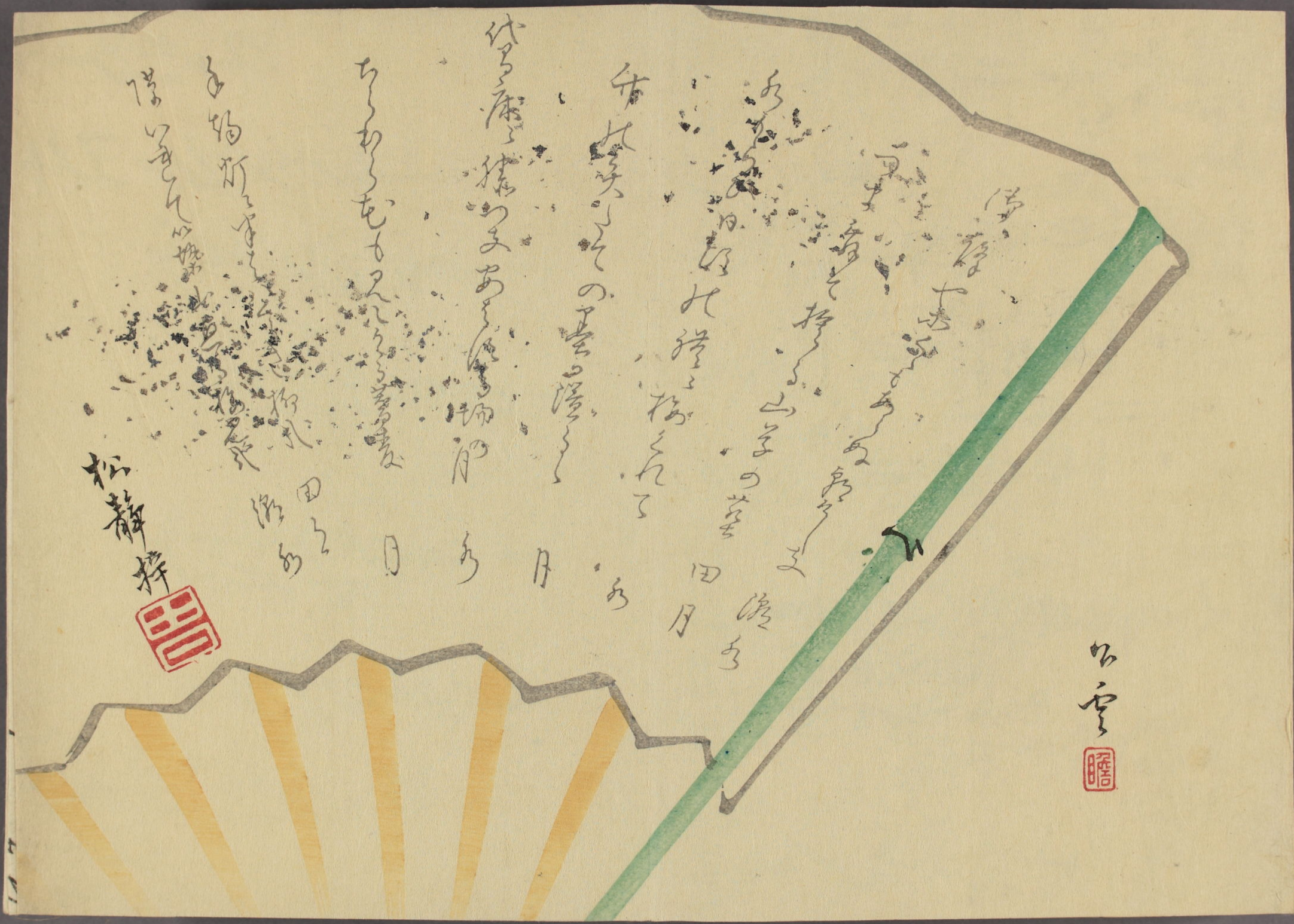
うつひなきまつと
ゆめかも

申の春

凡兄の中







應嚮作一神一兎畫
源大

應嚮家筆

もゝ栗と筆と一ふでやしけ仲間　梅民
梅の白玉まそかゝ一種おそ　糸丸
あもうと初ふうふ仲　乙松

まそうやりまそよおそうふ笠　雅六
身と梅乃ちまゝ一ふでやさの　錦鶏
第七世乃孫や四ツ木　の太
まもおそ一ふでやしけ仲間　英之

梅芽
糸丸

お松のおそう隣うそう　金九
おゝふかうそう　月麿

おそうふかうそう初うそ　狙山
そうやそう紙なれ多年神　蒼白
そうくの男八百そうそ　梅史
昔のもゝ八百そうそ　雪甲
いうそうそうそう白ふ初うれ　星雪
よれそうの先ゝ初うそ　几石

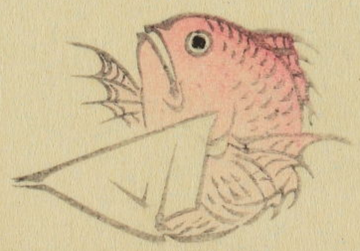
たそうそうれ松ふそうそ

乙松

泉村子所秋光
埜山

かけ稲乃ときき里や家の己ニ新　字尺
一ノ走し月代時乃汐も里　梅景
つらなりてあり也一ノ也山乃沈　玉藤
鶴ゑらや飼鶴うたふ里のもつ里　几堂
風なりに小ゑの此やうる整末ニ亦　唐白
五位のなくかたつら降や秋の為　乗楽
ひとつ家や裏へ寸れ此を菊の花　梅め
和らこれ手に走き寄さ沼砧ニなし　泉め
一枝を潜にもぬらら和葉ニ亦事　鶴江め
葦うりや山めつらしき歩りあり　鶴逸
日和めく草の此おとや萩乃花　埜童
石の志れぬ木ゑもあやうる和葉ゑ　洛水

丁卯秋



吉行写図
[illegible]大

其西の山見原るやよろ日の出　西京　百可
う里ゆ来て枝西面し番り　梅　アハ　耘堂
和鶏を取うち揃うて少々なり　赤穂　遠洲
昇る日ハ　おとろふ梅の白ひ花　、　遠流
ひとつ家も照るつきやまし梅の香　、　遠水
古の若や花もまつ代乃こましら　似塚
つ春やひとの白ふあさあらし　松平
粉の子の当切れや若なまり味　嵐水
菜を照らけや線のいさり宮ひ　阿宮
つ松ハしまや来て抱ふすめ子那　南汀
ちろ鶏子御手たちなり雲とこそ　史拙
ゑまもなりて辞さ礼者や日暮る方　瀬水

壬戌元日

有元子

生まるる

あした

元旦

初五子初丑二支はじめて歌月之大小

指もおらで数ふるやたらち野梅字

うめの花 梅めしと人や小ぶねきて 正好

うめ一とうもゝ花乃大うらう 花朱

うしろうらう風やなうふの大うめ 全庵

ひつこねをさんてうまの 冥古

ねうんてうまに涼く 大はし一

うめをあてうら月うけや小田乃明 色紅

いちもんこ有かねひや大垣川 雪指

こゑふるふくらき 小ぶね桂之

山ぶきの黄うまふや大とうう 三克

田鶯北方へ告るを乃を小ぶき 松亭

うぐひすの名ねや大神泉如風

うめさまさまふり 高小斜

東里山

乾隆社の諸君にまゐる
中の時に於ける

清きつる雲面白し夏の月　堂江
納涼の床に蔚持ちたる　梅坡
中庭の留拓石に苔のりて　雅多
稜古ぬりの絵のあつかひ　雅笑
暮遅く雲に着き荷宰領　南鈴
嘶り通ひ多の数しく　乾友

下畧

浪花

蝉も拓けしき裏にまゐる　江

余興　梅鉢

同し橋二三家をたる納涼の　坡

小雨きる水に水きもや水る　多

白雨わ多も嬉しき濡てる泉　友

叢は秋きのたしき紅や乾布たる　笑

浪花の沢橋をたりて来る
向ふ堂江朝を送る

月の出る方へ帰しまゐ門ぬりの　鈴

成寅夏日

雨山

梅のさく
あらそふ香り
ふたつ哉

雨山

松堂

書つけよ
我もそうじて
梅を哉

松堂

梅壽

ふるさとや
梅のあるじも
代かはり

梅壽

水竜

梅さくや
山もとくらき
ともし哉

水竜

歌麿

梅のまに
ほのめく
灯や泥沼

歌麿

少年

梅のかを
ふくや
袖もぬるゝ

少年

春朝

梅のうち
ほえるの
あとの
雪

春朝

芦静

冬ごもり
ふもとの
山や
雪の
朝

芦静

竜園

枕うえ
梅のさく
山や
雪の
暮

竜園

竜亀

梅さくや
ふるき
門の
ひとつ
松

竜亀

梅枝

書そめの
筆にも
梅の
香を
つゝむ

梅枝

一渚

梅のさく
あらそふ
香り
ふたつ
哉

一渚

おと村

雲山

老さらぬ此傍に蔭に蔭により相ひとを　接松

入海や汐に隈とる秋の月　可丈

鶴賀やてら柴に名をよせの礼　君操

あさごむや老らり蛙恰の雲と立　朝宵

帰るらん此蔭にあいらや二日の月　橘園

あら海も静まられてくらふの月　市重

月鏡や永き人待軒ふきやう　梅芽

てる月やきらりと見る棹の舟　雲童

石町三樓橋の座中を接ひて

雑俳と写も屋ろう月の笑ひ夏　鶴逸

川なりに雲此なりる月歌仙　鶴舟